
とある科学の十字障壁<クロスロード>

あくせる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある科学の十字障壁＞クロスロード＜

【Nコード】

N3903X

【作者名】

あくせる

【あらすじ】

呪われた力を持つ少年と、穢れた運命に呪われた少女。科学と魔術が交差するとき、物語は始まる――！！

とある少年のお話

＊

「……うわぁー、マジで最悪だぞコレ」

俺の名前は枢木 護。職業は、しがない高校一年生である。

『やったぁー！！今日から夏休みだァー！！』と終業式を迎えた昼間から、薄暗くなってきた今まで遊び呆けていたのだが、今はとてつもなく最悪な状況に陥っていた。

「ねえ、君バイトしない？仕事って言っても俺の財布の代わりをするだけだからさあ」

「そうそう。ボコられる代わりに財布になるんだぜ。良い話だろ？」

俺の目の前にいるのは明らかに煙草スパス吸っている、心肺機能にも俺の財布にも悪い二人の不良。

何かもう、帰らせていただけませんかね？ お金なら置いていきますんで（残金税込み105円也）。

と、そんなに上手く行かないのが俺の日常。

嫌です、と不良の優しいお誘いをお断りした俺は成されるがまま、両脇をガッチリホールドされて路地裏へ。残念なことに、学園都市はビルも多いが、路地裏も多いのだ。

「っ、さて……せめてサンドバッグの代わりぐらい殴らせてくれよ」

「そうそう。もち、代金は取らないからさあー」

とか言って拳の関節やら首をゴキゴキ鳴らし、準備運動を始める不良たち。

いや、先ずはタコ殴りされた後の俺の治療費を要求したいんですけど。どうせ拒否されるのは目に見えてるけどさ。

……ま、どちらが勝つか、それは戦う前から解っている事だけど。

俺も目の前の不良どもを見習って肩やらをぐるぐる回してやる気がある様子を見せつける。そして俺は此所が”裏”であることを良いことに、口角を吊り上げ怪しく微笑む。

「ふうーん。取り敢えず、”喰う側”が”喰われる側”に変わらないように注意しやがれッ！」

——先手必勝。俺はこの無駄に煩い不良どもを黙られるため、両手を体の前に突きだし、”能力”を発動させようとするが、

その演算は、目の前、つまり不良の背後に広がる暗闇の通路から聞こえてくる足音に中断された。

コッン、コッン、と狭い路地裏に楽しく響き渡るソレは、俺の視線と共に、不良の注意も引き付けるのには十分すぎる程怪しいものであった。

そして、靴の音を響かせながら路地裏の影から生えるように出てきたのは、

「超面倒です。こんなSFみたいな力技の任務は麦野に超丁度いいのに」

それは、12才くらいの女の子だった。如何にも無害そうな優しい顔立ちの、ミニスカートの上に羽織ったパーカーがよく似合う可愛い女の子。ビューティフルではなく、キュートな感じの。

そんな少女の姿を確認するや否や、今さっきまで弱気な態度であった不良どもが調子に乗り出した。

「……おや？君は一人？迷子かな？良かったらお兄さんたちと良いことして遊ばない？」

「大丈夫。悪いようにはしないからねえ？」

不良たちは調子に乗っていた。

だから、不良たちは気付かない。目の前にいる少女の”異質さ”に。異質な美少女は言い寄ってくる不良＞ゴミ＜どもを一瞥し、ふうーと短く息を吐いて口を開いた。

「――超邪魔です」

次の瞬間、少女のデコピンを喰らった不良の一人が弾き飛ばされた。弾き飛ばされた不良は自分の身に何が起こったのか理解しないまま、ビルの壁に激突し動かなくなった。

「このアマアアアア!!」

残された不良は足元に落ちていた木材>ユウシャノケン<を取り、仲間の敵である美少女>マオウ<の頭を殴り飛ばした。殴り飛ばされた少女の頭は熟れたトマトのように叩き潰され、ぐちゃぐちゃになる。

しかし、現実には砕け散ったのは少女の頭ではなく、薄汚れた木材の方だった。

「ひいー」

そんな情けない声を上げた不良は、手に砕けた木片を持ったまま後退する。不良の頭の中は目の前の少女の姿をした、恐怖で一杯になった。

「もういいですか?こっちも予定が超詰まっているので早く何処かに消えてください」

さもないと超我慢できないので、と少女が地面を蹴るとその地面がへこんでクレーターが出来た。

そんな怪物染みた光景を目の当たりにした不良は、ガタガタ震えながら近くに落ちていた不良を抱えあげて、一目散に逃げていく。ざまあ。

この街では『路地裏の不良』最強』という構図は成り立たない。この街の不良は『使えない>レベル0<』の烙印を押された、文字通りの不良品。彼らは蹂躪する側ではなく、蹂躪される側として扱われている。

「で、貴方は超逃げないんですか？」

「ん？」

使えない烙印を押された不良たちを嘆いていると、その少女はヘッピリオブジェクトと化していた俺の方を振り返る。

いきなりの話の展開に俺は少女の言おうとしている事が解らなかった。

「何で俺が逃げなきゃいけないんだよ？」

「貴方は私が超怖くないんですか？」

確かに彼女の言う通りだ。俺は彼女の化け物染みた力を垣間見た。これで恐怖を抱くなど言う方が難しい。いや、むしろ既に抱えています。

この可愛い少女は、コンクリートの地面を細く白い足で粉々に碎いたのだ。誰だよ。この女の子をサ○ヤ人に変えたやつ。

例え彼女が超絶美少女だったとしても、戦闘力がかなり高いのは怖いに決まっている。

それでも逃げない理由はただ一つ。

「怖いけど、まだお礼してないし」

「は？」

すつとんきような答えが返ってきたので、俺は繰り返す。

「だから、君は怖いけどまだ助けてもらったお礼してねえだろ」

少女は『この目の前の男は超何を言っているのですか?』というような表情をしたまま固まっかている。対する俺もこんな事は慣れてないのになあー、と頭を掻きながら説明する。

「いやー、えーっと、不良に絡まれてたのは俺だったから。

君がイライラして不良をブツ飛ばしたとしても、君が俺を助けたことに変わりはないだろ? だから、そのお礼をしたいなって」

俺が苦笑いしながらそう言うと、目の前の少女はプツと吹き出した。何でそこで吹き出すんだよ。コッチは大真面目だぞ。

「貴方は超変わってます。そんなおかしい事を言う人は初めて見ました」

そうやって笑顔を絶やさない女の子は、年相応の和やかな雰囲気を感じ出していた。今さっきまでの氷のような冷たい雰囲気を感じさせない程に。では、今さっきまでの彼女の雰囲気は何だったのだろうか?

暖かい彼女と、冷たい彼女。どちらが本当の少女の姿か、俺の頭では考えることは出来ない。

「まあ、自分がおかしな奴だって事は自覚はしてんだけど」

すると、少女は笑顔のまま、

「お礼ですか……そうですね……」

——空気が変わる。

「じゃあ死んでください」

そして、少女は笑顔のまま俺に殴りかかってきた……………ッ！！

「マジかよッッ!?!」

「超大真面目です」

俺が急いでバックステップで拳をかわすと、俺がついさっきまで立っていた場所が陥没した。

「超避けないでください」

「そんなの無理だよッ！何ですか、このいきなりの無理矢理急展開！！誰か俺に分かりやすく説明してくれ！」

「そんなの、私が貴方を狙う殺し屋だからに超決まってるからです」

それなんてゴルゴ！？とか言う既に意味不明な突っ込みを吐きながら、ひたすら拳をかわす俺。

いや、可笑しいとは思いましたよ？だって俺みたいな脇役が、こんな美少女と遭遇＞エンカウント＜するイベントなんて発生するわけないし。何処かの不幸な奴みたいになフラグ立てること無理な事ぐらい解ってたけど。

それでも少しぐらい期待はしてたんだよッ！宝くじ買うときぐらい仄かな期待を懷いてたんですよッ！

それがいきなり殺し屋にガチで命狙われるなんて、

「超最悪だアアアッ！！」

「私の真似は超やめてください……ッ！」

そして何故か拳を避け続けれる俺に対して、イライラした少女はポケットから何かを取り出し、俺に向けて構えてきた。

言わずもがな、黒光りが激しい例のアレ、銃です。

そんなもの喰らったら一発で天国行きな俺は、路地裏の壁に立て掛けてあったゴミ箱の蓋を盾にする。

ドン、という音より早く俺に迫ってきた弾丸は蓋を持つ俺の手を十二分に痺れさせる。盾はへこんではいるが、まだまだ盾として使えるようだ。流石学園都市。たかが金属製のゴミ箱の蓋一つとっても高性能である。

だから俺はその蓋を少女に投げつける。銃弾にすら耐えるソレは円盤のように回転し、少女の頭を捉えるが、

「そんな柔な攻撃は超効きませんから」

少女に当たる直前、蓋は何かに阻まれ、そのまま地面に落ちた。

「だろうな、だから狙いはコッチだ」

ザッ、と地面を蹴り飛ばした俺は少女の目と鼻の先まで接近した。蓋を投げたのは目眩まし。そして、ここまで接近すれば、俺の攻撃も通るはず。

俺は右手を突きだし、唱える。

「――ファイアブレスッ!!」

豪、とうねりながら、俺の右手から発生した炎は0距離で少女を覆い、燃やし尽くす

訳にはいかなかった。

赤く燃え盛る大きな炎は少女を燃やすことなく、少女が右手を振るだけで消えてしまった。

俺の渾身の攻撃もまた目眩ましにしかない。いや、目眩ましで十分だ。

「こっから形勢逆転だぞ、コラァァァ!」

「とか超叫びながら走って逃げるのはどうかと思いますが」

いちいち煩いぞ!! 逃げるが勝ちってのは、大昔からの鉄則なんですよ!

俺はもう一度少女の方に向かって炎を放ち、少女の視界を塞ぐ。後ろから銃を撃たれたりしたら話にならない。

しかし、目眩ましとかいう素人のような攻撃を少女は読んでいて、

「同じ手は超喰らいません!」

信じられない事に少女は迫り来る炎をものともせず、俺に突っ込む。

「でも残念! 似たような手を何度も出すかよ」

少女に向かっていたかのようにみえた俺の炎は、近くのゴミ箱を吹き飛ばし、少女の視界に多くのゴミを撒き散らす。

「……、なッ!!」

炎の中を通るのを躊躇わなかった、殺し屋の少女の足が止まった。少女の視界をゴミだけでなく、埃も舞っていて前方を完全に塞いでいた。

「うッ、ち、超臭いです」

止めは処理される前の生ゴミの腐敗臭。この強烈な臭いを前に動ける女の子がいるだろうか？

そして、俺は鼻を手で摘まみ手が塞がった少女を尻目にじめじめした路地裏を飛び出した。俺が走りながら西の方を見ると、太陽は完全に沈んでいた。表の『学園都市』は既に薄暗く濃青に染まっており、俺がどれだけ長い間裏にいたのかを教えてくれている。

しかし、これは気休めにしかない。きっと少女も俺を追い駆けて来るだろう。裏の人間が甘くないのは既に学習済み。

でも俺は彼女を倒す方法なんて持ち合わせていない。

（あー、……面倒くせー。ツたく、そもそも7月19日がいけないんだよ。7月19日がいけないに決まってるですよ、コンチクショー！！）

ん？待てよ？と俺は考える。今日は7月19日。確か今日は……
……。俺は脳みそをフル回転させて自分の思考を纏めあげ、思わず
顔が緩んでしまった。

うん。これならいけるかもしれない。彼女の超能力＞ボウギョク
をどうにか出来るはず。

そうと解れば話は早い。長距離走なら自信がある。俺は目的地ま
での地図を頭に描き、地面を蹴り走る速度を上げた。

＊

長い間走っていたせいか、思わず地面に座り込みたくなる衝動を

押さえながら俺は辺りを見回した。

『学園都市』を包んでいた濃青の色はいつの間にか消え去り、代わりに漆黒の闇がこの街を覆っている。空に浮かぶ三日月は、そんな俺を嘲笑う口の様な形をしていた。

ここに来るまで何度死ぬかと思ったことか。途中首輪が外れたチワワに追い掛けられた時が一番ヤバかった。何とか五体満足で逃げている自分を誉めてあげたい。

今俺が立っているのは、第七学区の端に位置する、とある鉄橋の近く。鉄橋の下にある川の水面がザザツ、と奇妙な音を上げている。

時間も時間、場所も場所なので近くに人の気配は無い。いや、無かった。

「超粘りましたね」

「いちいち煩いんだよ。しつこい女は嫌われるって彼氏に教えてもらわなかったか？」

「ええ。それにそんなもの超要りませんから」

そんな軽口を叩きながら、俺の前方から三度現れるのは俺を殺したがるとある美少女。

いや、違う。

「名前は絹旗最愛。学園都市が誇るレベル4の『窒素装甲』。学園都市暗部のアイテムに所属する、『暗黒の5月計画』の遺児か」

少女、いや、絹旗の表情が一変。

「……、どうしてその事を？」

「さあな」

「だからですか。暗部に命を狙われても動じないのは」

「さあ、どうだろう？」

これは時間稼ぎにしか過ぎない。この会話に勿論意味なんて無い。時間稼ぎもこの作戦の内なのだ。

「超わかりました」

少しの間の後、絹旗は俺という存在を再思考し、

「理由はよくわかりませんが、これは超時間稼ぎですね」

ばれたア！超俺の作戦筒抜けだし！竹輪ぐらい筒抜けしてるよ！

イヤまだだ。ここをポーカーフェイスで乗り切れれば。

「ふっ、ふ、ふ、どうだろう」

「その動揺は超肯定として受け取ります」

無理だー！！俺にポーカーフェイスなんて無理。無理なんですよ
コンチクショー！！

「だったら時間稼ぎをさせないためにも、超早く始末しないといけません——ねえ——！！」

ズン、と絹旗は地面を蹴り俺との距離を縮め、飛び掛かってきた。

「ファイア、ブレス！」

俺は右手から炎を生み出し、絹旗を迎え撃つ。俺の炎は空気中の酸素を取り込み、赤い螺旋を描き絹旗へと吸い込まれていく。しかし絹旗はそれを避ける素振りすら見せずに、右手を振るだけで燃え盛る炎を消した。

絹旗は気付いたのだ。俺の炎は見かけ倒し、実は威力めちゃうちや弱いって事に。だから『窒素装甲』を破れない炎は避けなかったのだ。

しょうがない。ここでは炎しか見せない予定だったが、予定変更。

俺は十字架のように両手を横に大きく広げ、再び唱える。

「インフニティ・ストーム！！」

俺はそれを唱えた瞬間に発生した風の渦を両手に纏わせ、発射。

風速にして時速80キロメートル、コンクリートや車でさえ吹き

飛ばす威力を持つ風の渦が絹旗を肉薄した。

な、に？と驚きの声を絹旗が上げながら、両手で顔を守る体制を作るが、それが意味をなすことはなく、絹旗は鉄橋の方へ吹き飛ばされた。

ドン、と思い衝撃が鉄橋の地面を襲う。正直な所これで殺られてくれた方がいいのだが。

絹旗はそれでも何事もなかったかのように起き上がる。いや、無傷では無い。絹旗の服は破けているし腕にも青い痣が出来ていた。俺の攻撃は微弱ながら確かに通っている。

「超驚きました。貴方は『発火能力者』だと思っていましたが、まさか風まで操り始めるとは」

「貴方はもしかや『多重能力者』？」

——多重能力者＞デュアルスキル＜。

この学園都市で誰もが知っている常識。それは能力は一人に一つしか与えられるということ。

その常識を打ち破り、理論上不可能とされてきた理論を証明した、複数の能力を持つ者。それが『多重能力者』。

確かに俺は荒ぶる風や燃え盛る炎を操る事が出来る。しかし、

「世の中そんなに上手くいとかよ。生憎その予想は外れだ」

そんな旨い話がこの世界に在るわけ無い。全ての事柄には理由があり、説明できる。そして、勿論俺の能力>チカラくにもカラクリが存在する。それを絹旗に教えるつもりはないが。

「……、超わかりました。だったら本当の事を話してくれる気になるように、力ずくで聞き出します」

辺り一面を覆う闇の中で一際目立つ一輪の花のように絹旗は、凛と俺の前にそびえ立つ。それは決して越えられない壁のように。高く頂く山のように。

ならば。話は簡単だ。

「なあ？」

「この時に及んでまた時間稼ぎですか？」

身構える絹旗に対し、俺は構えもせず言葉を繋げる。

「――超電磁砲＞レールガン＜って言葉知ってるか？」

「何が超言いたいんですか？」

「簡単な話、フレミングの法則か何かで物体を発射する、とんでも艦載兵器らしいんだけど」

そう。高い壁があるなら穴を掘ればいいし、高い山があるならトンネルを掘ればいい。

「超電磁砲って、こんなものの事を言うらしいぜ？」

瞬間、鉄橋の中央から地面を抉り飛ばしながらオレンジ色の光が音速の三倍の速さで飛んできた。……絹旗目掛けて。

な、に？と絹旗は急いで超電磁砲の射線上から逃れようとするが、

音速の三倍の速さで飛んでくる物体を避けるなど到底無理な話。

直後、俺の耳を爆音が襲い、長かった勝負はあっさりとたった一撃で決した。

「……………超ひ…きょうで…………す」

「大丈夫。自覚はある」

超電磁砲は地面に深い傷跡を残し、俺の目の前で消え去った。距離にして約50メートル。目の前の道路が挟れている。それに対して、絹旗が盾になってくれたお陰で俺は無傷。絹旗は気絶しているようだ。

「ちょっと！あんたたち大丈夫！？怪我してない！」

「ううッ。だから上条さんはビリビリ止めろって言ったんでせうよ」

「ビリビリ言うなッ！！」

そう言いながら駆け寄ってきた一組の男女。一人は半袖の白いブラウスにサマーセーター、灰色のプリーツスカートの中学生ぐらい

の女の子。もう一人はチクチク頭の半袖のカッターの高校生ぐらいの男子。

「ああ、大丈夫だよ（俺は）。魔○光殺砲が飛んできた時はとても驚いたぜ（絹旗が）。マジで死ぬかと思ったよ（絹旗が）」

「ああっ、それなら良かった……よくねえエエエエ！！何ですかその隣で気絶した女の子はア！！貴方様盾にしますよね！一体貴方は誰……って護！？一体何してるんですかアアア！」

イガクリ頭の上条当麻君の言語は全然理解できなかったが、

「俺は決して彼女を盾に使った訳じゃない。彼女が勝手に盾になってくれただけだよ」

「鬼畜！？」

「説明しよう！上条当麻君は僕のクラスメート。そして旗を建築しまくる男の敵でもあるのだ！！」

そうやって俺たち二人がふざけあっているのに納得いかないビリ

ビリが一人。

「いい加減、無視すんなゴラアアア！」

ドン、と『超電磁砲』こと御坂美琴の額から電撃の槍が飛び出してくる。

しかしそれは消、と上条が右手を振るだけで消えた。

「いきなり危ないでしょうがビリビリ。上条さんじゃなかったら気絶じゃすみませんの事よ」

「そうだービリビリ。いきなりビリビリしやがって危ないだろ。それにピ○チュウなんて今時需要ねえよ」

「何よアンタたち！！特にアンタ！」

ビリビリピカチュウ事、御坂美琴は俺の方をビシッ！！と指を指してきた。

「って俺？」

「そうアンタよアンタ！この前はよくもやってくれたわね！」

「護ってビリビリとも知り合いなのかよ！？」

上条は驚いたような声を上げたが生憎そんな関係じゃない。

「違うし。アレはピカチュウがレールガンなんて危ないもん乱発するから」

「ピカチュウ言うな！」

あー、ややこしい。だからコイツらには関わりたくないんだよ。

そしてイライラが絶頂に達した御坂は、

「もういい加減二人とも殺られなさいよ！ゴキブリ並みにしぶとすぎるのよアンタたち！」

すると、今さっきの電撃とは比べ物にならないような威力の電撃が俺たち目掛けて飛んできた。

俺は取り敢えず地面に伸びている絹旗を抱いて横に飛び、電撃は再び上条に打ち消された。

「わっ！！危ないぞビリビリ。ビリビリが女の子にまた当たったらどうするんですか!？」

「うるさいうるさいうるさーい!!」

御坂美琴が天高く叫ぶと、暗い空に暗黒の雲が集まってきた。それはやりすぎだアアアア!と上条が叫ぶが時既に遅し。ゴゴゴと雲の中で雷が鳴る音が学園都市に響き渡る。

その困った状況を、絹旗を抱き抱えたまま見つめる俺は、この7月19日をこう締め括る。

「ついてねえーよな」

それはまるでこの世の全てを嘆くように。この世界に生まれてしまったことを後悔するように。

「お前、ホントついてねえーよ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3903x/>

とある科学の十字障壁<crossroad>

2011年11月11日23時59分発行